

構造・原理を知って、試して、インシデント実例を聞いて 閉鎖式輸液システムの使用法を再確認

閉鎖式輸液システムを導入する医療機関は多い。しかし、使い方を誤ると、逆に血流感染や針刺し事故を引き起こしかねない。そこで、網走厚生病院では、改めて「シュアプラグ」の使用法を確認する研修を行った。その模様をお届けする。

「これまで、フィルター付きとフィルターなしのシュアプラグが院内に混在していました。そこで、改めてフィルター使用のぜひについて考えてみることにしたのです」と話すのは、網走厚生病院医療安全管理室の森美雅さん。

同院では従来、中心静脈カテーテルに接続する輸液セットは基本的にフィルター付きのものを使用していた。

「道内の6つの厚生連総合病院の担当者で議論をしたところ、病院ごとに解釈はまちまちでした。検討の結果、当院では一部の部署を除いてフィルターなしのシ

ュアプラグに統一することになり、これを機に異物混入防止の勉強会を行うことになりました」

今回、中心静脈カテーテルにかかわるすべてのスタッフを対象に勉強会が行われた。これは、テルモ社提供のT-PAS(予測・予防型の安全対策)とよばれる、全国の医療機関からメーカー側に寄せられた安全性情報をもとに組み立てられた研修プログラムである。シリンジや閉鎖式輸液ラインといった実際の汎用医療機器を用いて、添付文書に記載された注意事項のうち、発生頻度や危険度の高い事例を

模擬的に体験することで、正しい使い方を理解するというものである。

混注口を見て構造を理解

「シュアプラグの混注口を、できるだけ明るい方向に向けてシリンジの筒先を押し込んでください。閉じているシリコンゴムの内側から光の筋が見えてきます」という説明に応じて、会場からは口々に納得の声があがった。

「いままでスリットの状態をまじまじと見たことがなかったので、新鮮でした」と、

●研修後の感想

体験をしながらの研修で、よりわかりやすかった(イメージしやすかった)

実際にやってみることで、これから注意していこうという意識づけになった



ふだん使っているルートのリスクが改めて理解できた

シュアプラグをずっと使用しているが、実際に針を刺したり、引っ張ったりということは禁忌だったので、いままで行ったことはなかったが、実際にやってみるとなぜだめなのかがよくわかった

シュアプラグの構造がよくわからなかったのですが、ためになった



シュアプラグの混注口をのぞいて、形状を確認



輸液セットのチューブは素材の違いで強度も違う。参加者全員で一斉に引っ張ってみました

93人の看護師と12人の薬剤師のほか、計106人が参加
(2011年6/9、6/14開催の研修参加者へのアンケート結果より)



「同じテーブルのスタッフも、初めて機器の構造を見て知ったようでした」と話す産科・婦人科・新生児病棟看護科長の嵯峨井敦子さん



「注意すべき点が明らかになってよかった」と話す内科・整形外科病棟の清野美和子さん(左)と坂野あゆみさん(右)

研修に参加した産科・婦人科・新生児病棟看護科長の嵯峨井敦子さんは話す。

「シユアプラグの混注口に針を使ってはいけないという認識は、私たちのなかでは当たり前のことでしたが、混注口に針を刺して液漏れした例が大学病院であったと聞いて、絶対にインシデントは起きないとは言いきれないと思いました」

また、内科・整形外科病棟の清野美和子さんは、「在宅で使用する針を刺すタイプ

の輸液セットに慣れてしまって、閉鎖式を知らないナースの場合、液漏れ事故も起こりうると感じました」と、インシデントが身近に起こる可能性が0ではないことを改めて認識したという。

同病棟の坂野あゆみさんは、「薬液が注入される機器の構造とか、もし針を刺してしまった場合どういうことが起こるのか、事例をとおして振り返ることができました。頭のなかでは針は刺さないという認識はあるのですが、新人に指導するときに、“どうしてだめなのか”という理由もあわせて教えることができると思いました」と、後輩への指導内容の充実につながると期待する。



フィルターなしのシユアプラグで院内の使用機器を統一するという事故防止策

は、同時にもう1つのねらいがあった。

「薬剤吸着の少ないPVCフリーのチューブを新たに導入することになり、医療機器全体のコストを見直したことがきっかけでした。フィルターなしの輸液セットへの変更で減資したぶん、ほかの分野への安全対策に役立てることにしたのです」と森さんは説明する。

無から有を生み出すことは難しいが、いまあるものを取捨選択し、改善に導く方策は日常業務でも有効であろう。

また、発端となったチューブへの薬剤吸着の認識もスタッフ間でまちまちであったため、体験型研修で飽きさせることなく理解を促せるメリットは大きいと話す。



診療支援センター医療安全管理室専従セーフティマネジャーの森美雅さん



実技研修には根拠とイメージを伝えることが大切

外来看護科長・教育担当 桑原 淳子さん

研修を導入する際、大切なことは“根拠をどう伝えるか”ということです。それから、実技の研修では使い方のイメージをもつことも大切です。当院の教育委員会でも実践型といって、衛星放送での講義を見てイメージをつけてから、院内の演習に参加してもらうなどの工夫をしています。T-PAS研修では、実際の機器を用いて存分に試すことができたことが、参加者にとっても印象に残ったのではないかと思います。実際に見て、聞いて、感じて、自分の五感を使って学ぶことで、先輩に100言われるより理解できたのではないのでしょうか。



いきいきと楽しみながら日常の手技を確認

看護副部長・教育担当 花田 郁枝さん

さまざまなスタッフが参加した今回の研修は、新人には新たな学びの機会となり、ベテランには自分の知識・技術の振り返りの機会になったと思います。とくに、このような機器のシミュレーションは入職時の新人研修にかぎられてしまうので、プリセプターをはじめ実地指導者にとって役立つものになったのではないのでしょうか。現場で行っているKYT研修とあわせて、日常的に見逃しやすいことを改めて意識でき、事故防止につながるのではないかと期待しています。研修中はあちこちで歓声が上がって、スタッフがいきいきしており、フィッシュ哲学を導入している当院としてもよかったですね。